

看護学科の4年生6名が兵庫頸髄損傷者連絡会主催の集まりにボランティアとして参加

「失ったものを数えるな。残されたものを最大限に活かせ」

これはパラリンピック（身体障害者の国際スポーツ大会）の創始者、ルートヴィヒ・グットマン博士が唱えた基本理念です。この理念は、障がい受容の最終的な形として価値の転換が起こると、今ある機能に目を向け自分らしく生きていくことができるという考え方です。

みなさんは、先日のリオでのパラリンピックで、障がいを持ちながらも果敢に自己の可能性に挑戦する方の姿から人の無限の力や強さを感じられたことと思います。

看護学科は4年時になると自分の看護への関心領域から看護学研究に取り組みます。看護学領域の内の在宅看護学の研究ゼミでは、これまで、研究以外に学生の発案で健康フェアに災害時の避難所の展示や調査に取り組んできました。今年は、有志の学生6名（小林翔真・澤田里沙・永井未紗来・中村愛・中之内亮太・松原実咲）と教員が課題別実習で出会った頸髄損傷の患者さんからの誘いを受け、兵庫県頸髄損傷者連絡会主催のバーベキュー大会にボランティアとして参加し、会の当事者の方と大いに語り、時には看護者としての在り方を教わりながら貴重な1日を過ごしました。



大会は、9月18日（日）の午後に行われました。当日は、当事者の方30名、ボランティアの方60名の計90名の参加がありました。場所は明石大橋を展望できる大蔵海岸です。

頸髄損傷の中でも頸椎の1～3の重度の方は人工呼吸器をつけておられましたが、当日は多くの方の安全を図りながらリーダーとして大いに活躍されました。

学生は、受付係、参加費徴収、会場設置係、バーベキューの焼き手そして頸髄損傷の当事者の方の食事のサポートとして活躍しました。

参加した学生のコメントとともに、当日の写真を掲載します（看護学科教員 畑 吉節未）。

課題別総合実習での頸髄損傷の方との出会いから「障がい」とは「その人の個性である」という考え方を学び、私の人間観は大きく変化しました。そして今回、当事者の方の話を聞くにつれ、私は障がいのある方のみならず健常者も、人としての可能性を見つけそれを最大限に活かすことが重要であると学んだ。これらの学びを今後、看護実践を行う上で大いに役立てたいと強く思います。また、今後このような活動の機会があれば自身の考え方や価値観を広げるためにも積極的に参加したい。（中之内亮太）



写真：中之内 亮太さん・澤田 里沙さん

私は今回初めて頸髄損傷の方とお話する機会を前にとても緊張していました。

そのような中、ある方が「一つ一つの障がい乗り越えれば、自分の可能性は無限にある。」とお話してくださいました。身体の障がいはあっても、それはハンディキャップではなく、自分の魅力として捉えておられ、とても輝いておられるように感じました。私はこの経験から、その人の可能性を決めつけるのではなく、その人の考えや思いなどに耳を傾ける中から見えてくるものがあることを学びました。(澤田里沙)

私の今までの頸髄損傷の方のイメージは、車椅子に乗り、人工呼吸器をつけているというものでした。私は、同じテーブルになった女性とお話する中で、一人暮らしをされていると聞き、とても驚きました。今改めて考えると、「この人には、一人暮らしはできないだろう」という思い込みがあったから驚いたのだということに気がきました。私たちが勝手に限界を決めずに、その人が望む生活を送れるよう出来る限りサポートすることが看護師として必要な姿勢だと学びました(松原実咲)



写真右: 松原 実咲さん



写真右: 永井未紗来さん

今まで車椅子で自立し、生活している方のお話を聞くことが初めてのためか不安と期待が半分ずつあった。ところが、実際にお話してみると明るく、ユーモアたっぷりに笑わせてくださり、いつの間にか不安など消えて楽しくその方たちと過ごすことができました。自分では障がいのある方を差別してないと思っていましたが、心の奥では自分たちと違う存在だと思っていたから不安であったのかもしれませんが、今回の体験で障がいは、その人の個性の一つであると実感することができました。(永井未紗来)

今回のボランティアでは、これまでに関わることのできなかった頸髄損傷の方や脳性麻痺の方々とお会いすることができました。

様々な困難を乗り越えてきたからこそ聞ける話、感じていることを直接聞くことができました。障がい＝マイナスではなく、個性だと改めて感じることができました。(小林翔真)



写真左:小林翔真さん

みなさんが楽しくお話をされている中で、お互いを思い合うあたたかな心遣いが、多く見られました。私自身、普段の生活の中で周りの人々に思いやりをもって、また助け合いの精神を持って接しているだろうかと改めて考えさせられました。また、人は1人では生きていけず周りの人々との支え合いの中で生きる存在であるのだと感じました。そして、みなさんの姿を見て周りの人々に感謝し思いやりや関心をもって関わることの大切さを深く教えられました。

しかし受傷から、この笑顔を取り戻されるまでには、私の想像以上にさまざまな苦痛や苦悩を経験されてこられたのではないかと感じました。

手足が自由に動かせない人々にとって、自分の意志があっても、自分の力のみで生活できることは、当たり前ではないこと、しかし自分の意思で生活することが大きな生きがいに繋がると感じました。(中村愛)



写真左:中村 愛さん



写真右から:中村・松原・中之内・澤田・小林・畑

兵庫頸髄損傷者連絡会主催のバーベキュー大会に参加いただき、ありがとうございました。初めて参加してみてもいかがでしたか。頸髄損傷のイメージも個々の中で変わりつつあるかもしれませんね。一緒に楽しい時間を過ごせたのも、みなさんや支援者さんの協力を得られたからだと感じています。

これから自分たちが進もうと考えている道は、医療だけを求められているのではなく、選択肢も一緒に考えてあげることかもしれません。みなさんに伝えたいことは、病院での役割は治療も大事だけど、マイナスな気持ちをゼロにまでもっていくことだと私は思っています。

経験は必ず活かされるときがきます。みなさんと出会うことで希望や可能性をみつけられる患者さんがいるはずです。今しか得られないことは「出会い」であり、つながりが情報の一つになります。選択肢は一つではないことを多くの患者さんに伝えてあげてほしいです。

最後に「過去があるから、今がある」「今があるから、将来がある」

(兵庫頸髄損傷者連絡会 役員 島本 卓)